

日々の研修と自己研鑽

— 授業改善に活かす教材研究の視点2 —

国語科 金森 久貴

教育公務員特例法第21条「教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない。」という記述にもあるように、教員は職務にあたる限り、研究と修養に努め、研修の機会を貴重な学びの場にしていかなければならない。私自身にとって、平成30年度は研究企画部に配置され、新たな教育研究の内容に触れることが多い一年であり、またSGH研究大会の研究授業でも、助言者・先導者に恵まれ、充実した教材研究を行うことができた。その際に得た学び、知見、課題と問題意識について記し、今後の自己研鑽の糧、他の先生方にとっての気づきのきっかけとなることを企図して紀要とする。今年度も教科指導を中心にまとめる。

キーワード：授業改善 教材研究 SGH研究大会 評価と目標

1. はじめに

平成30年度は昨年から継続して授業改善を図っていくことを大目標として位置付けていた。

年度当初に立てた目的と目標は以下の通り。

【目標】 授業の充実を図るため、教材研究と教授法の改善を行う。

【手法】 生徒が自ら問を立て、実践を伴った学習を行うことを支援する。

2. 研究大会の研究授業

2018年11月17日、第5回SGH研究大会（於金沢大学附属高校）で研究授業を行った。教科は現代文、対象学年は一年生である。

(1) 目標達成の手だて

昨年度の中堅教諭等資質向上研修や教材研究では、「問」を活かして授業を活性化することを意識していながらも、日常の授業化から「問」を活かしていなかったという反省があった。そのため、日常的に「問」を授業の中心に据えるための手立てとし

て、「たった一つを変えるだけ：クラスも教師も自立する『質問づくり』」（著者：ダン＝ロスステイン 出版社：新評論）を参考にしようと考えた。そうすることで、学級にポジティブな変化が現れるのではないかと意図してのことである。

(2) 授業準備

1年生の国語総合の授業で、評論文の単元の中で「質問づくり」の手法を取り入れた。評論文では、書かれていることに対して、身の回りでの具体例を意識できるかどうかを理解を深めるために必要である。そこでこれまではどのような具体例があるか、授業の際に質問するようにしていたが、その部分を「質問づくり」に置き換えることとした。

教員の発問する「良い質問」よりも、生徒が自ら考えた質問の方が、生徒にとって主体的かつ深い学びにつながるという、「たった一つを変えるだけ」の一節にも後押しされた。

そもそも国語の授業の目的は、生涯にわたって、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表

現する資質・能力を育成することにある。課題を発見する意識を持つことは、生涯にわたる社会生活にも必要である。「質問づくり」の授業を通して生徒が自律的な学習主体になるための手助けをしたと考えた。

その一方、国語の授業で「質問づくり」を取り入れようとした際、良い質問を作るためには、結局は文章について正確に理解することが必要である、ということも明らかになった。

文章の要旨を的確に把握すること、筆者の主張を読み取ること、書き手の意図をとらえること、これができなければ、「問」が見当はずれのものになってしまうかねない。生徒にとって、深い学びにつながる「問」をつくるためには、文章を正確に理解することが必要な条件となる。

そこで授業は、1. 文章の正確な読解、2. 質問づくり、という2つのステップに分けて行った。

また、評価については以下のようなルーブリックを考えた。

到達度	①	②	③
A	評論文から書き手の主張を読み取り、課題発見・課題解決の意志を持って、現在や未来の社会の姿を考えている。	文章の構成を把握し、評論文の内容を的確に理解して、筆者の主張の背景を理解することができる。	文中の意味と一般的な意味の違いを理解し、その表現効果を把握して、語感を磨き語彙を豊かにしている。
B	評論文の内容から書き手の主張を読み取り、現在や未来の社会の姿を考えている。	文章の構成を把握し、評論文の内容を的確に理解することができる。	文中の意味と一般的な意味の違いを理解し、語感を磨き語彙を豊かにしている。
C	評論文の内容から書き手の主張を読み取っている。	文章を読み、評論文の内容を理解することができる。	文中の語句の意味を理解し、一般的な意味との違いを把握している。
D	評論文から書き手の主張を読み取ることができない。	評論文の内容を理解していない。	文中の語句の意味を読み取ることができない。

ルーブリックの①～③はそれぞれ単元の目標。

①評論文から書き手の主張を読み取り、現在や未来の社会の姿を考えようとする。(関心・意欲・態度)
 ②文章の構成を把握し、評論文の内容を的確に理解することができる。(読む能力)

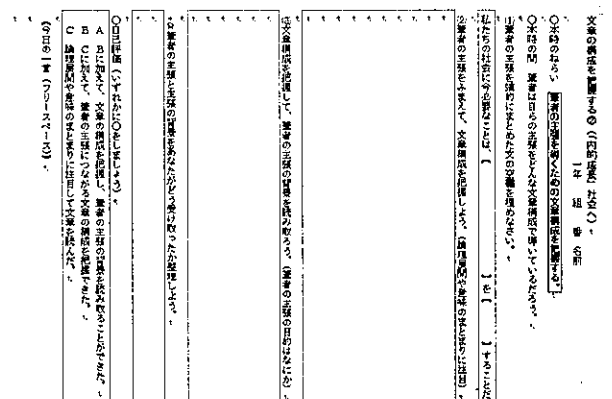
③語句の一般的な意味と文中での意味の違いを読み取り、語感を磨き語彙を豊かにする。(知識・技能)のように目標を立てていた。

特に①の到達度Aに記したように、「課題発見・課題解決の意志を持って」現代文に取り組む生徒が一人でも増えることが、単元を通じての大きな目標であった。

(3) 授業実践

研究授業を実施するにあたり、若狭高校の渡邊久暢教諭に依頼し、授業のねらいや設計について助言をいただいた。

事前のアドバイスとして、授業の設計について、「授業後、生徒に具体的にどのような力がつくことを意図して授業を計画しているか」「生徒のどのような姿を見て評価するのか」という指摘を受け、「質問づくり」という枠組みで期待していることは、生徒の能力に依存したものであり、「国語でつけたい力」が具体的に意識されていないことに気づかされた。そこで、研究授業当日の授業内容については、生徒が「文章構成を把握して、筆者の主張を読み取る力をつける」ことにテーマを絞ることにした。



(授業で使用したワークシート)

授業で扱った文章は、『「内的成長」社会へ』（上田紀行 改訂版現代文B《教研出版》より）。「グローバル化の光と影」（小熊英二 高等学校国語総合現代文編〔改訂版〕《三省堂》）と読み比べて題材についての理解が深まるものを選ぶ意図で教材を選定した。

主たる発問は「筆者の主張はどのような文章構成によって導かれているか」とした。「文章構成」を意識して読解を行うことで、他の文章を読み取る際にも活用できる力を付けることを目的としている。

本校の生徒は「筆者の主張」を読み取ることは、「なんとなく」できてしまうため、論理的な裏付けを持って読解する力を付けたいという意図である。

以下授業中の生徒の活動（計画）を記す。

1. 文章を読み取り、筆者の主張を理解する。
2. 文章を論理の展開や意味のまとまりに注目して読み取る。（囲みや矢印などを用いるよう促す）
3. 読み取った文章構成を言葉で共有する
4. 自分たちの活動の内容の妥当性を確認する。
5. 筆者の主張の背景を読み取り、文章の目的を考える。
6. 読み取った主張の背景・文章の目的を言葉で共有する。
7. 読み取った主張の背景・文章の目的を全体に発表・共有する。

（実際の授業では6、7については未達）

授業後の整理会には生徒が出席し、遠慮なく意見や感想を述べてもらった。また、渡邊久暢教諭のファシリテーションによる話し合い活動も行われた。

以下に整理会の内容の抜粋を記す。

参観者A「ワークシートの(1)と(2)はよかったが、(3)の「背景」が生徒にとってわかりにくかったのではないかと。→生徒も同様にワークシートの(3)の意図がわからなかった。

参観者B「（生徒に対して）時間をもっと欲しかったのはどこの部分か。」

生徒「国語の正解はいろいろあるので、全部の班の発表を聞くことができれば良い。比較検討して、自分の意見を再構成できる。」

などの意見が出された。

整理会の最後には渡邊久暢教諭から、以下のような指摘をいただいた。

教材のポイントと目標とがあってないので、コンテンツ中心の授業を行ってしまう。「構成」に注目させたいなら、それにふさわしい教材を選ぶ必要がある。授業中に生徒の状況をもっと見るようにする。授業者自身にとって、借り物の目標だから、生徒も腑に落ちる理解ができていない。

指摘の通り、どうしても「つきたい力」よりも「内容」に着目させたい傾向があることを実感した。「学習の目標と指導と評価の一体化」を意識して、「具体的にどのような力がつくか」にフォーカスした授業設計をしようと心掛けていても、結果的には「内容」に寄せた授業になってしまう。「借り物の目標」という指摘はまさに的確なものだった。

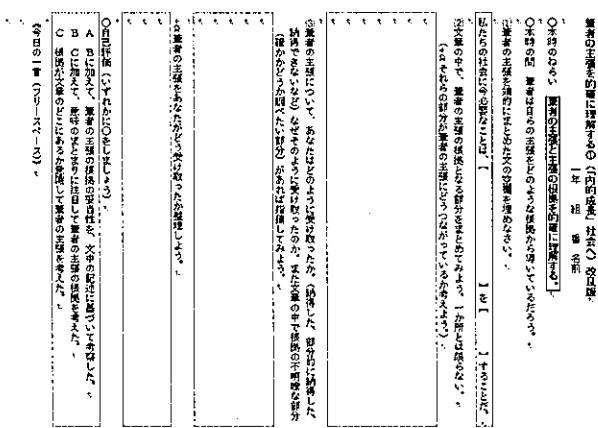
また、「目標は評価から生まれる」という指摘もあった。生徒の実情を把握した上で、何が必要か考えるようにすることは、改めて自覚的に取り組む必要を感じた。目標→指導→評価→目標というサイクルを作っていくためには、「生徒をよく見る」ことが必要ということに常に意識して授業を計画する大切さを改めて思い知らされた（「自分のため」に授業をしてはいけないということだ）。

「学習の目標と指導と評価の一体化」は、生徒視点の授業を行うこと、生徒が中心となる計画を立てることと不可分であり、どのような授業を行うにしても、生徒を「よく見る」ことがスタートラインとやらなくてはならない。

(4) 成果と課題

生徒による振り返りも、渡邊教諭による指摘も、いずれも授業者の行った授業に対するフィードバックであり、このような率直な反応をすぐに受けることは、自らの授業改善のためには極めて有用だと考える。とはいえ日常的に整理会を行うこと、授業参観と助言を請うこと、ともに時間の制約等もあり難しい。そこで、ワークシートに設けているコメント欄を利用して、フィードバックを得ていくこと、授業後に、直接生徒の反応を聞くようにすること、可能な限り、授業中に生徒の取り組みを確認し、つまづいているところ、物足りないところ、モチベーションの様子などを「よく見る」こと、これらのことを行って、フィードバックを自分から受け取りに行くことを心掛けていきたい。

研究授業の後に行った別クラスの授業では、プリントを改善した上で授業を行った。



(別クラスに配布したプリント)

主な変更点としては、「構成」を読解のてがかりとせず、主張につながる文中の根拠を探すようにした点、生徒が筆者の主張に納得できたか、できなかったか、なぜそう感じたのかを記述するようにした点などである。

授業後のフィードバックを受け、生徒にとって取り組みやすく、授業の意図が明確になるようにという目的で変更した。このように、「生徒を見て」授業改善をしていくことが今後の課題である。

4. 今後の指導にあたり

昨年の紀要に以下のように記した。

「意識しなければならないことは、自主的な振り返りや反省ができるような客観的視点を自ら持ち続けることである。そのためにも、指導の記録をつけること、成果と課題を『見える化』することは必要不可欠だ」

今年度の紀要を書くにあたって、課題の「見える化」「記録」ということを意識した。どのように良い指摘を受けても、そのことによって授業が改善されなければ、指摘を活かしたことにはならない。

「生徒をよく見る」こと、そして目の前の生徒に何が必要か、どのように関わるかという視点を最初に持つことが大切だということは、当たり前のように、自分自身に足りない部分であった。

成果と課題のフィードバックから、改めて学習課題を定めていくというサイクルを、意識的・継続的に行っていきたい。そのためには、授業内外問わず、多角的に生徒を理解しようと努めることが不可欠である。また、「学習の目標と指導と評価の一体化」を目指していくことが自らの授業改善につながることも今回感じられた。

「質問づくり」の取り組みも、私自身の教材研究の不足により、生徒の具体的な到達像を明確にすることができず、不十分なものとなってしまったが、「生徒を見る」結果、今の生徒に問を立てる力が必要だと感じられた時には、改めて実践したい。

研究と修養を常に意識し、実践した内容を身体化することを大切に、これからも教材研究に勤めていきたい。